



Title	学習指導要領におけるボールゲームでの技能内容の変遷に関する研究 : 「ゴール型」ゲームにおける「集団的技能」に着目して
Author(s)	宗野, 文俊; 佐藤, 亮平
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 120, 137-158
Issue Date	2014-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.120.137
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56430
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12219452_120_137-158.pdf



学習指導要領におけるボールゲームでの技能内容の変遷に関する研究

——「ゴール型」ゲームにおける「集団的技能」に着目して——

宗 野 文 俊* 佐 藤 亮 平*

【要旨】 本稿では、戦後の学習指導要領における「ゴール型」ゲームの戦術的内容を示すと考えられる「集団的技能」に着目し、戦術的課題の取り扱いの変遷について検討した。その結果、ボールゲーム指導では一貫して「ゲーム」の質を向上させることが目指されてきており、その中で「集団的技能」は、ボール操作や身体操作の技能である「個人的技能」と「ゲーム」を結びつける媒介項として位置づけられ、この「集団的技能」の位置づけが現行学習指導要領における「ボールを持たないときの動き」として踏襲されていることが明らかになった。そして、戦術的要素である「集団的技能」を容易で単純なものから複雑で難解なものへと線形的に積み上げて全体の「ゲーム」に発展させるように企図されてきたものであるため、「ゲーム」そのものの変容をとらえる観点を見出す必要があることが示唆された。

【キーワード】「ゴール型」ゲーム、戦術学習、集団的技能、ボールを持たないときの動き

はじめに

近年、学校体育におけるボールゲーム指導において、戦術的課題を中核にすえた「戦術学習」が盛んに行われるようになってきた。現行学習指導要領でのボールゲーム領域¹では、学校段階を問わず一貫して「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の3つのカテゴリーで分類され、各カテゴリーに属する種目には共通した戦術的要素、特に「ボールを持たないときの動き(off the ball movement)」を習得することでゲームパフォーマンスの向上と学習の転移を企図するものであった(高橋, 2010:p. 152)。

しかし、これまでの学校体育におけるボールゲームの授業において、ゲームの「戦略」や「戦術」を学習内容として扱ってこなかったわけではない。現行学習指導要領改訂以前までは、「集団的技能」という用語を使用して戦術的な内容を示してきた。この「集団的技能」は、これまでその意味が明確に定義づけられたわけではなく、さらに学習指導要領が改訂されるたびにその意味内容が変化してきたものであるが、主に個人的技能を組み合わせた動きや複数人数による動きについて示されてきた。これは、個人戦術やグループ戦術、チーム戦術の動きについての内容が取り扱われてきたと考えられる。これまでの学習指導要領で「戦術」がどのように扱われてきたのかをみることは、現行の学習指導要領、さらには将来の改訂学習指導要領でのボールゲームにおける「戦術学習」の内容をどのようにとらえるべきなのかということを考える上で、非常に重要であると考えられる。しかしながら、学習指導要領においてボールゲームの「戦術」がどのように扱われてきたのかを明らかにしたものは見当たらない。

そこで、本稿では、戦後の学習指導要領におけるボールゲーム領域の中で、特に現行指導要領で「ゴール型」ゲーム²に分類されていて、戦後各学校段階で一貫して取り扱われてきたパス

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程

ケットボール(小学校のポートボールを含む)とサッカー(小学校のラインサッカー, 簡易サッカーを含む)での戦術的内容と考えられる「集団的技能」の内容に着目し, 学習指導要領での「ゴール型」ボールゲームにおける戦術的課題の取り扱いの変遷について通観し, 学習指導要領における戦術に関する取り扱いについて検討することを目的とした。

そのために, まず戦後の学習指導要領, 特に「技能」の内容が示されるようになった1958年に改訂された以降において, 「ゴール型」ゲームでの「技能」の位置づけとその取り扱いについて検討する。そこでは, 技能の内容を「基礎的技能」「応用的技能」「ゲーム」, あるいは「個人的技能」「集団的技能」「ゲーム」といった三つに区分してとらえられてきたが, 特に「集団的技能」の取り扱い方の変化について考察する。さらに, 小学校4年から高等学校までのバスケットボールとサッカーの技能内容を, 学習指導要領と現場の教師向けの手引書として文部省(文部科学省)が示した「指導書」「学習指導要領解説」から具体的にどのように変化してきたのかを検討し, その意義と課題について考察する。

ところで, 学習指導要領における技能内容は, その時どきの体育科の目標と密接に関係していることは言うまでもない。したがって, 本稿では, 体育科の目標を三つに時期区分を行った友添(2010:pp. 31-33)の論に依拠し, 1947年の学校体育指導要綱から1953年の小学校学習指導要領体育科編(試案)までの「新体育の目標」の時期を「新体育」期, 1958年と1968年に改訂された学習指導要領で「体力づくりを重視した目標」の時期を「系統・体力」期, 1977年以降に改訂された学習指導要領で「楽しさを重視した目標」の時期を「楽しい体育」期と三つに区分し³, それぞれの時期でのボールゲーム領域の技能内容, 特に「集団的技能」に着目して, 目標との関連も含めながらその変化の示す意味について検討していきたい。

1. 学習指導要領におけるボールゲームの技能内容の位置づけ

ボールゲーム, 特に「ゴール型」ゲームは, 各プレーヤーがコートの中で攻守が入り交じって味方や相手との関係の中で技能を発揮する必要性があるため, これまでの学習指導要領においても他の運動領域とは異なる技能内容のとらえ方をしている。ここでは, 各時期でボールゲーム領域の技能内容をどのようにとらえてきたのか検討し, その位置づけの変遷について考察する。

1. 1. 「新体育」期

戦後体育の大きな特徴は, 戦前の「体操中心」から「遊戯・スポーツ中心」に転換したところにみられる。これは, 占領軍による教育政策の中で, 軍国主義に大きく加担したと考えられた形式体操や武道が排斥され, スポーツの精神や原理が教育における民主主義理念と結びつけられた(岩田, 2004:p. 160)ことによる。また, 当時のアメリカでの中心的思潮であった生活経験主義および児童中心主義の教育理念である「新体育」が全面的に導入され, 遊戯やスポーツは「身体」に働きかける媒体でありながらも, 「全人形成」に寄与する「行為」であり, 戦前の「身体教育(education of the physical)」から「身体活動を通しての教育(education through physical activities)」へと転換させた(岩田, 2004:p. 160)。これらのことは, ボールゲームではチームという集団で行われる運動であることから, 「民主的人間形成・社会的態度の育成」と

直接的に結びつけられた。

1947年の学校体育指導要綱では、「教師の手引書・参考書」としての基本的性格を与えられつつ、学校体育の「民主化・科学化」を追求する方向性を打ち出し、戦前の体育からの大きな転換を図ろうとしたところに大きな特徴がみられる（岩田，2004:p. 161）。一方で、技能内容については詳細な記述はほとんどなされておらず、特にボールゲームについては、ルールやゲームの進め方を中心に説明がなされている。また、この時期の学習指導要領では、他の時期と比較して教材（運動種目）が多く提示されていることも特徴としてあげられる。特に、1949年の学習指導要領小学校体育編では、低学年で13種目、中学年で12種目、高学年で15種目と数多く示された。これらのことは、戦前の体操中心の授業が戦後になって遊戯・スポーツ中心に転換したものの、現場の教師はそれらのゲームがどのように行なうものなのかが分からないため、ルールやゲームの進め方の説明に多くを割いていると思われる。さらに、児童中心の問題解決を重視した学習展開の中で、ゲームでの動き方は教師から与えるものではないとされて、具体的な技能内容について詳述されなかったのではないかと考えられる。

1953年の小学校学習指導要領体育科編は、当時全国にわたって自主的に展開されてきた体育の学習指導研究の集積・結晶として、戦後新体育（生活体育）の成果を反映して作成されたものである（岩田，2004:p. 161）。この学習指導要領での特徴は、目標と教材（運動種目）、指導法および指導場面を直結させ、目標と教材（運動種目）との関係にそれを媒介する事項として「学習内容」の概念を導入したことである。そして、三つの目標（A:身体的目標、B:社会的目標、C:生活的目標）に対応して教材（運動種目）、指導法、指導場面の関係が示された。団体種目であるボールゲームは、特に民主的人間形成の観点から「B型学習」⁴を担うものとして重要視された。

「新体育」期のボールゲームの指導では、第一義に「好ましい人間関係（社会的態度）の育成」（文部省，1953:p. 132）であったため、技能については「指導上の一般的注意」の中でグループ活動を円滑に行なうために「基礎的技能」を身につけることの必要性を見出しているにすぎない。さらに、この「基礎的技能」がどのような位置づけがなされているのかはよく分からない。したがって、この時期の技能は、「民主的人間形成・社会的態度の育成」の目的を達成するための手段として取り扱われてきたと考えられる。

1. 2. 「系統・体力」期

1958年期学習指導要領では、それまでの「試案」としての手引書であった学習指導要領の基本的な性格から大きく変更され、「文部省告示」として官報に公示されて「法的拘束力」を有する国家基準を意味するとの行政解釈が強調され、教育内容における中央集権的な統制へと方向転換がなされた（岩田，2004:p. 162）。ここでは、「道徳」が新設されるとともに、従来の生活経験主義のもとでの基礎学力の低下が問題視され、「系統的な学習」が強調された。体育科教育においても、「問題解決学習論」「グループ学習論」と「系統学習論」の対立を経て、1958年期学習指導要領ではその教育内容面において、系統学習の立場をとり、運動文化の体系性や運動技術の系統性を重視する文化主義的体育へと転換した。その中で、「基礎的運動能力」や「運動技能」がその主要な目標として掲げられ、運動領域でも運動の文化的類型で構成されるようになった。そして、用語表記的な面では、「学習内容」という概念が消滅し、それまで「教材」として位置づけられてきた運動領域（運動遊びやスポーツ種目）が内容という名辞のもとに提示されるようになった。このことにともない、「内容」の意味対象は、一つは運動領域論的な視点か

らの内容構成、もう一つはそれぞれの運動分類の下位に位置づく能力論的な視点からの内容構成という異なる二つの枠組みから構成されることになった。(岩田, 2004:p. 163) これによって、体育科の内容構造は「目標→教材(運動種目)→学習内容」という手順に変更され、目標を達成するための学習内容の習得のために最適な教材(運動種目)は何かといった議論はもちろん、学習内容の領域やその設定の視点に関する問題意識や議論は必然的に後退し、体育学習指導における「素材主義(種目主義)」化の傾向を促すことになった(岩田, 2004:pp. 163-165)。

ボールゲーム領域における技能内容は、その複雑な内容から「基礎的技能」「応用的技能」「ゲーム」の三段階に区分し、小学校指導書ではその指導について、以下のように記されている。

はじめには基礎的技能を中心にして、それを用いたゲームおよびじゅうぶんと思われる応用的技能の学習を行い、次には応用的技能を中心として、それを用いたゲームおよびじゅうぶんと思われる基礎的技能の学習を行い、最後に、ゲームを中心として、応用的技能、基礎的技能の学習をする。(文部省, 1960a:p. 369, 傍点は筆者)

このような記述は、中学校指導書(文部省, 1960b:p. 301)でも同様になされており、特に中学校要領ではそれぞれの教材(運動種目)における「基本技能」「応用技能」「ゲーム」の内容が示された。ここでの「基礎的技能」とは、その運動種目を成立させるために必要とされるボール操作や身体動作の技能で、主に個人的な技能で体力的要素を含み入れて構成されていた。「応用的技能」は、基礎的技能を複数組み合わせた個人的技能あるいは複数人数で行使される攻撃または防御の動きについて示された。これらのことは、最初に個人的なボール操作と体力的要素を中心とした「基礎的技能」を習得させ、これらの基礎的技能を駆使して味方と連携した動きとなる「応用的技能」を身につけさせ、それらを統合して「ゲーム」へと至る学習過程を想定していると考えられる。

また、高等学校では、技能内容を「ゲーム」「集団技能」「個人技能」で示し、特に集団技能は「球技の特性に基づいてなされたものであり、他の運動領域の内容の示し方と異なる点」(文部省, 1961:pp. 19-20)であるとした。そして、学習を展開する上で、以下のようにそれぞれの内容を三つの段階に区分して重点的に指導することが望ましいとされた。

第1の段階では学習させようとする運動技能の概要を理解させた上で、個人技能を中心として、それに必要な程度の集団技能を学習させ、それを用いたゲームを行なわせ、第2の段階では、集団技能を中心として、それを用いたゲームや、まだじゅうぶんであると考えられる個人技能を学習させ、第3の段階では、ゲームを中心として、さらに個人技能や集団技能を学習させる。(文部省, 1961:p. 159, 傍点は筆者)

このように、高等学校ではボールゲームの技能を「個人技能」「集団技能」「ゲーム」に区分しているが、その意味内容は小学校・中学校での「基礎的技能」「応用的技能」「ゲーム」と同様であるということができると考えられる。したがって、1958年期学習指導要領では、技能内容の系統性を重視し、まず個人的なボール操作や身体操作である「基礎的技能」を習得してから、複合的で集団的な動きである「応用的技能」へと発展させ、最終的に「ゲーム」へと至る道すじが示されたと考えられる。

1968年期学習指導要領では、科学技術革新の時代的背景において「教育内容の現代化」が重点的に進められ、産業・経済界の要請に応えるための「人的能力開発」のための教育政策が実施され、基本的な知識や技能の習得が重視されるようになった。体育においては、当時飛躍的に成果を蓄積・増大させていった運動生理学を中心とする体力・トレーニング科学の研究を背景に、「基礎的運動能力」は「基礎体力」と同義と理解されるようになった。そして、この学習指導要領では「強健な身体育成」「体力向上」が中核的目標として位置づけられた(岩田, 2004:p. 165)。

ボールゲームにおいても、運動技能を支えるものとしての「基礎体力」が重視されたが、小学校から高等学校まで一貫して技能内容を「個人的技能」「集団的技能」「ゲーム」の三つに区分して示し、これらを以下のような関係で位置づけた。

種目によって異なったルールをもっているが、いずれもボールの取り扱いをめぐって集団対集団の間でゲームが行われるものである。その技能の内容は、相手との関連で集団の全員が直接あるいは間接に参与して組み立てる集団的技能が中心をなすものであり、さらに、それを成り立たせるための個人的技能と個人的技能や集団的技能を相手に応じて活用して行うゲームとに区分して考えることができる。(文部省, 1970a:p. 93, 傍点は筆者)

ここでは、1958年期学習指導要領のように「基礎的技能」→「応用的技能」→「ゲーム」という直線的な位置づけではなく、「集団的技能」を技能内容の中核に据えて、それを成立させるためのボール操作と身体操作である「個人的技能」と、これらの個人的技能と集団的技能を駆使して行う「ゲーム」とし、それぞれが密接に関連していてまとまった内容として考えることの必要性を示した。

その一方で、小学校では運動技能を学年の発達段階との関係から、低学年では「遊び」の段階、中学年から一定の技能を目指すようにし、中学年では「初歩的技能」、高学年では「基礎的技能」に重点をおくように位置づけられた(文部省, 1969a:pp. 24-26)。「遊び」は運動の特性にもとづいて技能の型が明確になっているわけではなく、いわば未分化なものとしてとらえられる段階、「初歩的技能」は運動技能として一般的な意味をもった型のものであるが、まだ中心的な技能の位置を占めるものではない段階、「基礎的技能」は運動の特性からみてその中心的な内容にふれるものであるが、まだその特性を完全な型で深めるところまでは至っていない段階であるとした。また、中学校では運動技能の学年別内容の手がかりとして、「初歩的段階」は第1学年、「進んだ段階」は第2学年、「さらに進んだ段階」は第3学年を想定して、段階ごとの取り扱いの重点を示した(文部省, 1970a:pp. 218-219)。これらのことは、運動技能を発達段階に応じて、容易で単純なものから複雑で難解なものへと積み重ねてゲームへと発展させていこうとする意図があると考えられる。

1. 3. 「楽しい体育」期

1977年期学習指導要領では、教育内容の現代化による児童生徒への過重負担を軽減させ、「ゆとりと充実」を学校に取り戻すことが求められた。そこでは、「自ら考え正しく判断できる児童生徒の育成」が掲げられ、人間性豊かな児童生徒を育てること、ゆとりのある充実した学校生活が送れるようにすること、国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視すると

ともに、児童生徒の個性や能力に応じた教育が行なわれるようにすることが改訂の方針とされた(岩田, 2004:p. 165)。体育目標では、特に「運動に親しませること」「楽しく明るい生活を営む態度を育てること」を強調し、「生涯を通じて運動を実践する態度や能力の基礎の育成」が明確なテーマとされる中で、運動における情意的体験を通した運動への愛好的態度の育成が示された。また、1970年代以降に「みんなのスポーツ (sport for all)」という言葉に代表される「スポーツの大衆化」が進み、生涯にわたるスポーツ実践(生涯スポーツ)と学校体育を連動させることが世界的動向となっていた。これらのことは、戦後に「運動による教育」へと転換した教科理念が、それを包み込みながらも総じて「運動の教育 (education in movement)」へと進展していった(岩田, 2004:p. 166)。このような体育の考え方の変化は、運動技能やそれをめぐる態度の学習も大切であるが、何よりも運動の楽しさ・喜びを理解させることが重要であるから、この学習指導要領では運動文化の類型的な内容構成を廃してより子どもの立場を重視するようになった。

ボールゲームの技能内容の位置づけは、競争やゲームを楽しく行なうことをねらいとしながらも、前の1968年期学習指導要領のものを踏襲していると思われる。小学校では、「簡単な集団技能を生かしたゲームができるようにする」(文部省, 1977a:p. 96)ことが目指され、「集団で相手と勝敗を競うことから集団技能を中心に、協力、公正などの態度が課題となる」(文部省, 1978a:p. 49)ことが示された。また、中学校では、ボールゲームは「個人的技能を前提としながらも、集団的技能による勝敗の経験をもたせることに重点を置くところに、他のスポーツと異なる大きな特徴がある」(文部省, 1978b:p. 22)として、「技能に関する内容は、集団的技能を中核的なものと考え、その集団的技能を成り立たせているものが個人的技能であり、これらの技能を総合的に生かし集団と集団が勝敗を争うものをゲーム」(文部省, 1978b:p. 49)として位置づけられた。

1989年期学習指導要領では、「21世紀を展望する教育改革」が打ち出される中で、「個性重視の原則」「生涯学習体系への移行」「変化への対応―国際社会への貢献・情報化社会への対応」といった基本的視点が掲げられ、とりわけ「個性重視」はその中心をなす事項として主張された(岩田, 2004:p. 166)。体育では、生涯スポーツと体力の向上を重視する観点から、児童生徒が自ら進んで運動に親しむ態度や能力を身につけ、心身を鍛えることができるように児童生徒の心身の発達の特性と運動の特性との関連を考慮し、「運動の教育」と「運動による教育」の複眼的立場が示された。そして、自発性・自主性にもとづく運動実践、運動に内包されている楽しさや喜びの重視、個に応じた指導の重視の観点に立って「一人ひとりを伸ばす学習指導の方向」として、学習過程のモデルとしての「ねらい・めあて学習」が提唱されたのもこの時期である(岩田, 2004:p. 166)。

こうした中で、ボールゲームは「ボールを扱いながら戦術や作戦を工夫して、集団対集団で得点を競い合う」(文部省, 1989b:p. 20)ところにその特性を見出し、「作戦を立てて勝敗を競い合う過程や結果に楽しさや喜びを味わうことができるようにする」(文部省, 1989d:p. 34)ことが重視された。さらには、各学校段階の指導書・解説における技能の表記が「ゲーム」「集団的技能」「個人的技能」の順に変更されたことから、集団としての動きを重視しながらゲームを組み立てることを技能内容の中心に位置づけるようになったと推察される。

1998年期学習指導要領では、子どもを取り巻く教育環境の変化と運動の能力や意欲・関心への二極化といったことを背景として、基本的には従来の生涯スポーツへの志向と体力の向上と

いう教科目標は継承しながら、子どもの心身(身体性や社会性)に働きかけるという意味において、学校教育全体の中における体育の役割が問われるようになった(岩田, 2004:p. 167)。また、授業時数の削減の影響から扱うべき運動の取り上げ方の弾力化が推し進められ、授業実践を通した各校独自のカリキュラム編成とその評価が求められた。

ボールゲームの技能内容は、前の1989年期学習指導要領のものを基本的に踏襲しており、「攻防の作戦を立てて勝敗を競い合う過程や結果に楽しさや喜びを味わうことができるようにすること」(文部省, 1999b:p. 44)が重視された。さらに、「自分のチームの特徴に応じた作戦を立ててゲームを行う」こと(文部省, 1999a:p. 24)や、「攻防の作戦を立てるに当たっては、自己(自己のチーム)や相手(相手チーム)の技能やチーム編成などの状況を的確に把握し」、「攻防の作戦に適した集団的技能、個人的技能を活用できるようにすること」(文部省, 1999b:p. 44)が求められた。これらのことは、形態的な技能だけでなく、味方や相手との関係からゲームの状況に応じた動きを考えながら実行するというボールゲームの戦術的要素を技能として位置づけようとしたことが考えられる。

2008年期学習指導要領では、21世紀における知識基盤社会化やグローバル化によって知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性が増大しており、このような状況下で確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育む重要性が増してきた。教育基本法や学校教育法の改正と相俟って、知・徳・体のバランスとともに基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等および学習意欲を重視し、学校教育ではこれらを調和的に育むことが求められた(文部科学省初等中等教育局教育課程課, 2013:p. 17)。体育については、児童が自ら進んで運動に親しむ資質や能力を身につけ、心身を鍛えることができるようにすることが重視されたことから、生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践していくことと体力の向上に関する指導の充実が図られることになった。

ボールゲームの技能内容については、これまでの種目固有の技能ではなく、「攻守の特徴(類似性・異質性)や『型』に共通する動きや技能を系統的に身に付けるという視点から種目を整理し」(文部科学省, 2008b:p. 7)、「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の三つの型で構成された。そして、それぞれの型において、攻防のためにボールを制御する技能である「ボール操作」と、ボール操作に至るための動きや守備にかかわる動きに関する技能である「ボールを持たないときの動き」を示した(文部科学省, 2008b:p. 18)。また、ゲームについては前の1998年期学習指導要領の内容を踏襲し、「ルールや作戦を工夫して、集団対集団の攻防によって競争することに楽しさや喜びを味わうことができる」(文部科学省, 2008b:p. 17)ようにすることが求められた。これらのことは、1998年期学習指導要領で示された戦術的内容を、特に「ボールを持たないときの動き」に着目することでより鮮明に打ち出したと考えられる。

「楽しい体育」期では、体育の目標として「楽しさや喜び」が前面に掲げられていたが、ボールゲームの技能内容の位置づけは、少しずつ変化していったと考えられる。1977年期では、目標は「楽しい体育」になったものの、ボールゲームの技能内容は以前の「系統・体力」期のものを引き継いだものであった。1989年期では、学習指導要領が大綱化されてその内容の記述が簡素化されたこともあり、詳細な技能内容が省略されて「ゲームが楽しくできる」ことが目指されるようになった。このような流れは現行学習指導要領である2008年期まで踏襲されているが、曖昧であった戦術的内容は2008年期の「ボールを持たないときの動き」が明示されること

表1 学習指導要領のボールゲーム領域における技能内容の位置づけの変遷（下線は筆者）

時期区分/改訂年/学校種		ボールゲーム領域における技能内容の位置づけ(指導書・解説を中心に)	
【新体育期】	1947(S22)年 学校体育 指導要綱	〈球技は〉その多くが野外で行われるために、極めて保健的であること、興味に富んでいるから、明朗な態度を養うこと、試合の形式をとって行われるために、社会性が養われ、特にスポーツ精神を養いうる。(大谷,1947:p.24) 球技は、児童、生徒の自発的活動を主として興味の深い運動であって、身体的、精神的な効果も大なるものであるが、これを正しく指導することは、仲々困難であるから、指導者は、常にその研究につとめ、所期の目的を達するようにしなければならない。特に、球技によってスポーツマンシップの高揚をはかり、社会的諸特性を涵養するようつとめなければならない。…(中略)…民主主義の体育はスポーツを中心に行われ、球技はその主要な教材となるのであるから、その重要性をかんがみ、正しい指導が行われるよういっそうの研究を望む次第である。(鶴岡,1948:はしがき)	
	1949(S24)年 学習指導要領 小学校体育編 (試案)	種々なボールによる活動で、大筋を発揮させ、調整力、正確度、判断力を練り、内蔵の機能を高めるとともに社会的性格の育成をはかる。低学年では、小筋の発達が未熟で目と手の協応も不十分であることから、簡易な運動を選び、秩序ある活動・学習を指導し、とくに社会性の発達に留意する。五・六年になると相当複雑なものも可能となり、協力の態度や責任ある行動の能力が発達するから、それを助長して秩序ある行動を学習させいろいろな方のボール運動を経験させる。(文部省,1949:pp.19-20)	
	1951(S26)年 中学校・高等学校 学習指導要領 保健体育科 体育編(試案)	〈中心教材・バスケットボールの特徴〉 一つのボールを用い、チームワークで協議する球技の代表的な一つであって、走跳びなどの基礎的運動能力とともに高度の特殊技術が養われる。体育上有効な教材であり、好ましい運動であるとされているが、一般的特徴をあげてみると次のとおりである。 1. 知的なチームゲームである。(文部省,1951:p.125) (2～5は省略)	
	1953(S28)年 小学校学習指導 要領体育科編 (試案)	この指導要領で取り扱うボール遊び、ボール運動は、各種のボールによって行われる運動で、普通は集団で、またはチームを作って行われるものであり、組織だったグループ活動として発展しやすいものである。このボール遊びやボール運動を目標との関係で考えてみると、特に重要なものは、好ましい人間関係(社会的態度)の育成である。この好ましい人間関係の育成を中心にして、さらに施設や用具をたいせいに扱い、また健康習慣を身につけることがもたいせつになってくる。そして体育科の授業は、当然運動や学習の場として展開させるのであるから、これらの目標に達する過程においてボールを扱ういろいろな技能を向上させ、また身体的発達上の効果も期待できることになる。(文部省,1953:p.132)	
【系統体力期】	1958(S33)年 期	小学校	ボール運動だけで構成されている高学年の指導計画に例をとってみれば、基礎的技能、応用的技能、ゲームのように、重点を三つにして次のように学習を進めさせる。すなわち、はじめは基礎的技能を中心にして、それを用いたゲームおよびそれに必要な応用的技能の学習を行い、次には応用的技能を中心として、それを用いたゲームおよびじゅうぶんと思われる基礎的技能の学習を行い、最後に、ゲームを中心として、応用的技能、基礎的技能の学習をする。(文部省,1960a:p.369)
		中学校	運動技能に関する内容は複雑であり、それぞれいくつかの段階に区分することができる。たとえば球技では、基礎技能、応用技能、ゲームに区別されている。このような場合には、重点を三つにし、3段階に分けて、次のように指導するのの一つの方法である。はじめは基礎技能の中心にして、それを用いたゲームおよびそれに必要な程度に応用技能の学習を行い、次には、応用技能を中心にして、それを用いたゲームおよびじゅうぶん基礎技能の学習を行い、最後には、ゲーム中心として基礎技能および応用技能を学習する。(文部省,1960b:p.301)
	1968(S43)年 期	小学校	ボール運動は、ボールを用いて行われる運動であるが、特にチームゲームであるところに最も中心的な特性をみることができる。そのため、勝敗を争う場面での個人的技能、集団の技能が重視され、特に集団による攻防が重点となっている点が他の運動領域とのちがいである。(文部省,1960a:p.20)
		中学校	それぞれの技能は、個人的技能、集団の技能およびゲームで構成されている。…(中略)…すなわち、技能は、種目によって異なったルールをもっているが、いずれもボールの取り扱いをめぐって集団対集団の間でゲームが行われるものである。その技能の内容は、相手との関連で集団の全員が直接あるいは間接に参与して組み立てる集団の技能が中心をなすものであり、さらに、それを成り立たせるための個人的技能と個人的技能や集団の技能を相手に応じて活用して行うゲームとに区分して考えることができるしたがって、個人的技能、集団の技能及びゲームは密接に関連しているものであり、またまた内容として考えることが必要である。(文部省,1970a:p.93)
【案い体育期】	1977(S52)年 期	小学校	バスケットボール及びサッカーの技能を養い、簡単な集団技能を生かしたゲームができるようにする。(文部省,1977a:p.96) ボール運動については、競争的スポーツの特性を…(中略)…重視する考え方をとった。(文部省,1978a:pp.13-14) 競争的スポーツでは、勝敗や規則をめぐっての行動の仕方が問題となるが、できるだけ競争やゲームの場を豊かにし、その楽しさを求めるなかで、望ましい行動の仕方が身につくような指導が大切である。…(中略)…ボール運動では、集団で相手と勝敗を競うことから集団技能を中心に協力、公正などの態度が課題となる。(文部省,1978a:pp.111-112)
		中学校	スポーツは、身体の発達や体力の向上を直接目指してつくられた運動ではなく、本来的には、スポーツを楽しく行うこと自体を目的とした運動で、この点で体操と明確に異なる運動である。…(中略)…集団的スポーツは、個人的技能を前提としながらも、集団技能による勝敗の経験をもたせることに重点を置くところに、他のスポーツと異なる大きな特徴がある。(文部省,1978b:pp.21-22) 〔集団的スポーツの特性を考慮すれば〕技能に関する内容は、集団の技能を中核的なものと考え、その集団技能を成り立たせているものが個人的技能であり、これらの技能を総合的に生かし集団と集団が勝敗を争うものをゲームとして考えると、技能内容の構成と重点がとらえやすいと思われる。(文部省,1978b:p.49)
	1989(H1)年 期	小学校	ボール運動は、ボールを扱いながら戦術や作戦を工夫して、集団対集団で得点を競い合うスポーツである。小学校では、各種のボール運動の中から、サッカー、バスケットボールを取り上げ、ルールを工夫し、簡単な作戦を立ててゲームができるようにすることを目指している。したがって、これらの運動の指導に当たっては、児童の能力・適正・興味・関心等の状況を考慮してゲームを工夫し学習を進めていくことが必要である。(文部省,1989b:p.20)
		中学校	球技は、ボールを媒介して個人対個人、あるいは集団対集団で攻防を展開し、得点を取り合って勝敗を競うことをねらいとする運動である。したがって、球技では、作戦を立てて勝敗を競う過程や結果に楽しさや喜びを味わうことが大切である。(文部省,1989d:p.34)
	1998(H10)年 期	小学校	ボール運動は、自分のチームの特徴に応じた作戦を立ててゲームを行い、得点を競い合う集団的な運動である。…(中略)…ゴール型は、コート内で攻守が入り交じり、手や足などを使って攻防を組み立て、一定時間内に得点を競い合うことで、ベースボール型は、攻守を規則的に交替し合い、一定回数内で得点を競い合うこと、ネット型は、ネットに区切られたコートの中で攻防を組み立て、一定の得点に早く達することを競い合うことを課題としたゲームであり、それぞれの特性が十分に理解される必要がある。ボール運動の学習では、互に協力し、役割を分担して計画的に練習を行い、技能を身に付けてゲームをしたり、ルールや学習の場を工夫したりすることが学習の中心となる。(文部省,1999a:pp.24-25)
		中学校	球技は、ボールなどを媒介して、集団対集団、個人対個人で攻防を展開し得点を取り合って勝敗を競うことをねらいとし、チームの課題や自己の能力に適した課題の解決に取り組んだり、ゲームを楽しんだりする運動である。したがって、球技では、攻防の作戦を立てて勝敗を競い合う過程や結果に楽しさや喜びを味わうことができるようにすることが大切である。なお、攻防の作戦を立てるに当たっては、自己(自分のチーム)や相手(相手のチーム)の技能やチーム編成などの状況に的確に把握し、自己やチームの一人一人の能力を生かすことができるよう攻防の仕方を工夫するとともに、攻防の作成に適した集団の技能、個人的技能を活用できるようにすることが大切である。(文部省,1999b:p.44)
	2008(H20)年 期	小学校	〈ボール運動系の領域の運動は〉ルールや作戦を工夫して、集団対集団の攻防によって競争することを楽しむことや喜びを味わうことができる運動である。…(中略)…これらの領域における技能は、「ボール操作」と「ボールを持たないときの動き」で構成している。「ボール操作」はシュート・パス・キープ(ゴール型)、サービス・パス・返球(ネット型)、打球・捕球・返球(ベースボール型)など、攻防のためにボールを制御する技能である。「ボールを持たないときの動き」は、空間・ボールの落下点・目標(区域や塁など)に走り込み、見方をサポートする、相手のプレーヤーをマークするなど、ボール操作に至るための動きや守備にかかわる動きに関する技能である。(文部科学省,2008b:pp.17-18)
		中学校	球技は、ゴール型、ネット型及びベースボール型などから構成され、個人やチームの能力に応じた作戦を立て、集団対集団、個人対個人で勝敗を競うことに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。…(中略)…中学校では、基本的な技能や仲間と連携した動きを発展させて、作戦に応じた技術で仲間と連携しゲームが展開できるようにすることが求められる。(文部科学省,2008d:p.83)

によって、「ゲーム」の楽しさを実現しようとする意図が明確になったと考えられる。

1. 4. 学習指導要領における「集団的技能」の位置づけ

表1は、戦後の学習指導要領のボールゲーム領域における技能内容の位置づけの変遷をまとめたものである。戦後学習指導要領におけるボールゲーム領域の内容の位置づけとして、一貫して共通するものは集団で対峙するチームスポーツであるという観点である。特に、「新体育」期では民主的人間関係や社会的態度の育成がその学習内容として打ち出され、児童・生徒中心主義の教育理念から運動技能を教え込むのではなく、児童生徒の自発的な活動を重視したために、技能内容については簡潔に示されただけで、しかもそれぞれの技能の関係性についてはほとんど触れられていなかった。

学習内容の系統性が重視された「系統・体力」期において、ボールゲームの技能内容は一定の整理がなされたと考えられる。1958年期では基礎学力の重視という方向性から、ボールゲームの技能内容を「基礎的技能」→「応用的技能」→「ゲーム」と積み上げていく道すじが導き出された。しかしながら、ゲーム全体から部分に切り分けた技能を積み上げてもゲーム全体の質が向上しないことが指摘され（橋本, 1960:p. 95-96）、1968年期ではゲームの中でグループでの動きを示す「集団的技能」を技能内容の中核に据えることで、ボール操作や身体操作の動きである「個人的技能」と「ゲーム」を結びつけるものとして位置づけた。これは、「ゲーム」の質を向上させるために、「個人的技能」との『媒介項』として「集団的技能」をとらえていたことが考えられる。「楽しい体育」期においては、1977年期では前の1968年期のものを踏襲して「集団的技能」を技能内容の中核に位置づけているが、1989年期以降では「ゲーム」における戦術や作戦といったことを重視するようになった。しかしながら、ここでの戦術や作戦は集団（チーム）としてどのように動くのかということを意味しており、従前の「集団的技能」との違いはほとんどみられないと思われる。

このように、戦後の学習指導要領では、各時期において「ゲーム」の質を如何に向上させるかということが問われ続けてきた。そして、1968年期において「個人的技能」と「ゲーム」とつなぐ『媒介項』として「集団的技能」を位置づけたことが、現行の学習指導要領まで大きく影響を与えていると考えられる。

2. 「ゴール型」ゲームにおける技能内容の変遷

ここでは、戦後の学習指導要領において、「ゴール型」ゲームであるバスケットボールとサッカーの小学校4年から高等学校までの技能内容、特に「集団的技能」の内容が学習指導要領の改訂時にどのように変化してきたのかを通観し、その内容の変化について考察する。

2. 1. 「新体育」期

前述のように、この時期はボールゲームの目的が「社会的態度の育成」となっていたため、技能内容については詳述されていない。しかし、断片的ながら技能内容について触れている部分もある。例えば、1958年の小学校学習指導要領体育科編では、ボールゲームの指導上の一般

的注意として、グループ活動を重視して指導することとともに、基礎的技能の指導を考慮することが示された(文部省, 1953:pp. 134-135)。これは、ボールゲームの指導では社会的態度の育成をねらいとするのだが、それを達成するためにはグループ活動、すなわちチームの活動がよく行なわなければならない、チームプレーがよくできるためには基礎的な技能を身につけることによってのみ円滑に行なわれることになるとした。そして、チームゲームでは作戦が大切であるとして、作戦指導にあたって正しいモデルを示したり、正式のゲームに移る前にリードアップゲームを行なったりして興味を持って学習するように指導することが示された。しかしながら、「基礎的技能」が具体的にどんなものであるかということには全く触れておらず、正しい作戦のモデルが示されているわけではないため、技能内容をどのように指導すべきなのかということは明確にはなっていない。

また、1951年の中学校・高等学校学習指導要領保健体育科編では、中心教材での指導内容の項目を示している。例えば、中学校男子のバスケットボールでは、「バスケットボール一般(歴史、練習法、規則と用語、審判法、試合の運営、例話)、パス(チェストパス、アンダーパス、ショウルダーパス、オーバーハンドパス、バウンスパス、ランニングパス、キャッチ)、ドリブル(低いドリブル、高いドリブル)、シュート(チェストシュート、アンダーハンドシュート、オーバーヘッドシュート、ドリブルシュート、ランニングシュート、フリースロー)、フォロー(フォローしてパス、フォローしてシュート)、フットワーク(スタート、ストップ、ピボット)、ガーディング(個人、コンビを持った)、攻防法(速攻法、マンツウマンディフェンス、特殊な戦法)、ゲーム(簡易なゲーム)」(文部省, 1951:p. 54)と、指導内容が羅列的に示された。しかし、これらの指導内容がどのように関係し、どのように指導されるべきなのかといったことは全く言及されておらず、技能内容の位置づけもよく分からないものであった。

このようなことから、「新体育」期の技能内容は明確にとらえられたものではなく、「社会的態度の育成」の手段として位置づけられていたため、ゲームの質や技能の向上を図ることは困難であったことが推察される。

2. 2. 「系統・体力」期

2. 2. 1. 1958年期学習指導要領における「ゴール型」ゲームの技能内容

表2は、1958年期の各学校段階でのバスケットボールとサッカーの技能内容、特に「応用的技能(集団的技能)」の内容を示している。ここでは、技能を「基礎的技能」から「応用的技能」へと発展させて「ゲーム」に至る過程で位置づけられているため、発達段階に応じて容易で単純なものから複雑で難解なものへと積み上げていこうとする意図がうかがえる。

例えば、サッカー(小学校4年はラインサッカー、5・6年は簡易サッカー)のパスに関する「応用的技能」をみると、小学校4年では「パスされたボールはボールをよく見て、すばやく近づいて取る」、5年では「よい位置にいる味方を探し、パスし合ってボールをすめる」、6年では、「ボールが味方にあるときは、相手のじゃまをはずして動く」ことが示され、最初は自分とボールだけの関係から、自分と味方の関係、さらには自分と相手の関係を考慮した動きを習得させる意図が垣間みえる。そして、中学校1年では「ふたりの間でのパス」、2年では「3人の間でのパス」「ふたりでひとりを攻める」、3年では「ふたりのパスからのシュート」「3人でふたりを攻める」といったように、容易で単純な技能からより複雑で難解なものへ直線的に積み上げて「ゲーム」につなげようとしていることが推察される。

表2 1958年期における「ゴール型」ゲームの技能内容

学年	区分	バスケットボール(小学校はポートボール)	サッカー(小学4年はラインサッカー,5・6年は簡易サッカー)
小学校	4	ねらい 必要な技能を伸ばし,やや形の整ったゲームを行なう能力を養う。	必要な技能を伸ばし,やや形の整ったゲームを行なう能力を養う。
		技能 パスやドリブルでボールを進める。ボールをとったら,じゃまされていない味方を探してパスをする。パスしたらすぐにあいている所に走る。相手に触れないで相手をじゃまする。	相手や味方の位置に応じて方向・強さを考えてボールをける。パスされたボールをすばやく移動して取る。相手がボールをけるのを足でじゃまする。
	5	ねらい 必要な技術を身につけさせ,やや組織だったゲームを行なう能力を高める。	必要な技術を身につけさせ,やや組織だったゲームを行なう能力を高める。
		技能 走りながらボールを捕え,2歩以内にパスする。ドリブルして止まったら,続いてドリブルしないでパスかシュートする。三角パスをする。相手を決めてじゃまする。審判をする。	ドリブルやパスでボールを進め,ゴールにけり込む。足,脚,体を使ってボールを止める。頭の上からスローインする。相手のボールを前や横からじゃまする。ゴールキーパーは,ボールを手や足で止めて防ぐ。審判をする。
	6	ねらい 必要な技能を身につけさせ,やや組織だったゲームを行なう能力を高める。	必要な技能を身につけさせ,やや組織だったゲームを行なう能力を高める。
		技能 走っている味方の速度,方向も考えてパスをする。片手のパスをする。ボールだけでなくまわりも見て,ドリブルをする。ボールを得たら,速く攻める。相手を決めてじゃまする。審判をする。	右足も左足も使ってくる。ヘディングをする。ドリブルからパスやシュートをする。相手のボールを前や横からじゃまする。ポジションを守って攻めたり守ったりする。審判をする。
中学校	1	ねらい パスとキャッチ,ドリブル,シュートの基本技能および各種の応用技能や簡易な規則によるゲームなどを行なわせて,器用性,機敏性などの能力を養う。	小学校において学習した簡易サッカーの技能に基き,キック,ドリブル,ヘディング,トラッピング,シュート,スローインなどの基本技能を身につけ,ふたりの間のパスやトラッピングからのシュートなどの応用技能を身につけさせるようにする。
		基礎技能 パスとキャッチ(チェストパス,ハウンズパス),ドリブル,シュート(両手セットシュート,ランニングシュート)	キック(インステップキック,サイドキック),ドリブル,ヘディング,トラッピング,シュート,スローイン
		応用技能 走りながらのパス,ドリブルからシュート,ふたりでひとり攻める。	ふたりの間のパス,トラッピングからシュート
		ゲーム 簡単な規則によるゲームとその審判	簡単な規則によるゲームとその審判
	2	ねらい 各種のシュートやガードの基本技能および応用技能を正しく身につけて作戦を立ててゲームができるようにする。	キック,ドリブル,ヘディング,トラッピング,シュートなどの基本技能や応用技能の程度を高めて身につけ,攻防の技能を養う。
		基礎技能 パスとキャッチ(オーバーヘッドパス,アンダーハンドパス),ドリブル,シュート(ジャンプシュート),ガード	キック(動いているボールを止めないでける),ドリブル(だ行してドリブルする),ヘディング,トラッピング,シュート
		応用技能 3人でふたり攻める。カットインプレー(ふたりでふたり攻める)	3人の間のパス,ひとり対ひとり攻めたり守ったりする。ふたりでふたり攻める
		ゲーム 正規に近い規則によるゲームとその審判	正規に近い規則によるゲームとその審判
	3	ねらい 基本技能および応用技能に習熟するとともに速攻や遅攻を用いてゲームができるようにする。	基本技能や応用技能をゲームと関連づけて練習し,正規に近い規則でゲームができ,審判ができるようにする。
		基礎技能 パスとキャッチ,ドリブル,シュート(レイアップシュート,ジャンプシュート,セットシュート),ガード	キック(飛んでくるボールを落とさずにける),ドリブル(相手を抜いてドリブルする),ヘディング,トラッピング,シュート
		応用技能 3人でふたり攻める,3人で3人を攻める,ゾーンやフリースローから速攻する。	ボールを止めないでパスをする,ふたりのパスからのシュート,3人でふたり攻める。
		ゲーム 正規に近い規則によるゲームとその審判	正規に近い規則によるゲームとその審判
高等学校	個人技能	ねらい ゲームに必要なコンビネーションプレーや比較的小規模なフォーメーションを用いた攻撃と,それぞれの防御ができるようにする。	ゲームに必要なコンビネーションプレーや比較的小規模なフォーメーションを用いた攻撃と,それぞれの防御ができるようにする。
		バス,ドリブル,シュート,ガーディング	キック,トラッピング,ドリブル,ヘディング,タックル,シューティング
	集団技能	カットインプレーとその防御,スクリーンプレーとその防御,セットオフエンスとその防御,ファーストブレイクとその防御,マンツーマンディフェンスとその攻撃,ゾーンディフェンスとその攻撃	ジグザグパスを用いる攻撃とその防御,三角パスを用いる攻撃とその防御,シュートパスによる攻撃とその防御,ロングパスによる攻撃とその防御,スリーバック型防御とその攻撃
		ゲーム 正規に近い規則によるゲームとその審判	正規に近い規則によるゲームとその審判

また,ゲームの様相として,バスケットボールでは「ボールを得たら早く攻める(小学校6年)」、「ゾーンやフリースローから速攻する(中学校3年)」、サッカーでは「それぞれの活動範囲を守って縦に動き,攻めたり守ったりする(小学校6年)」といったように,ボールを持ったなるべく早く相手ゴールの近くへボールを運び形態が志向されていたと考えられる。これは,直線的に相手ゴールを目指すゲームの様相がより組織的なゲームとして位置づけられていたことが考えられる。したがって,1958年期学習指導要領における「ゴール型」ゲームの技能内容は,まず単純な「基礎的技能」からはじめて徐々に複雑な「応用的技能」を身につけることによって,「ゲーム」の質を向上させようとするものであったと推察される。

2. 2. 2. 1968年期学習指導要領における「ゴール型」ゲームの技能内容

表3は,1968年期の各学校段階でのバスケットボールとサッカーの技能内容を示している。ここでは,「集団的技能」が技能内容の中核と位置づけていることから,「個人的技能」を駆使して攻撃したり防御したりする動きの習得が目指された。ここでのゲーム様相でも,バスケット

表3 1968年期における「ゴール型」ゲームの技能内容

学年	区分	バスケットボール(小学校はポトボール)	サッカー(小学4年はラインサッカー)
小学校	第4学年	ねらい 全員がよく動き、互にパスしあって攻めることができるようにする。	よく動きあってボールを取り、ボールをけて攻めあうゲームができるようにする。
		技能 ボール運動の初歩的技能を養い、簡単なゲームができるようにする。 ア. ポートボール ボールをパスして攻めること、相手に触れないで済ますこと。	ボール運動の初歩的技能を養い、簡単なゲームができるようにする。 イ. ラインサッカー ボールをパスして攻めること、相手のボールを足で済ますこと。
	第5学年	ねらい 味方どうし離れてパスしあい、早い攻撃のみられるゲームができるようにする。	ポジションを守って縦に動き、ボールを相手のゴールに直線的に進めて攻めるゲームができるようにする。
		技能 ボール運動の基礎的技能を養い、ゲームや審判ができるようにする。 ア. ポートボール パスやドリブルで攻撃すること、すばやくもって防御すること。	ボール運動の基礎的技能を養い、ゲームや審判ができるようにする。 イ. サッカー パスやドリブルで攻撃すること、すばやくもって防御すること。
	第6学年	ねらい コートをじょうずに使って攻防の切りかえの早いゲームができるようにすること。	ポジションを守って縦に動き、ボールを相手のゴールに直線的に進めて攻めるゲームができるようにする。
		技能 ボール運動の基礎的技能を養い、ゲームや審判ができるようにする。 ア. ポートボール 相手の防御をかわしてパスやドリブルで攻撃すること、相手を決めて防御すること。	ボール運動の基礎的技能を養い、ゲームや審判ができるようにする。 イ. サッカー パスやドリブルで攻撃すること、すばやくもって防御すること。
中学校	ねらい	個人的技能、集団的技能を養い、それらを活用し攻撃や防御の作戦を立ててゲームができるようにする。	個人的技能、集団的技能を養い、それらを活用し攻撃や防御の作戦を立ててゲームができるようにする。
	個人的技能	パス、ドリブル、シュート、フットワーク	キック、ドリブル、シュート、ヘディング、トラッピング、タックル、スローイン
	集団的技能	速攻、カットインプレー、ポストプレー、対人防御、地域防御	キックアンドラッシュ攻撃とその防御、ロングパスやショートパスによる攻撃とその防御
	ゲーム	既習の技能を利用したゲーム	既習の技能を利用したゲーム
高等学校	ねらい	個人的技能や集団的技能を養い、それらの程度に応じた作戦を立ててゲームができるようにする。	個人的技能や集団的技能を養い、それらの程度に応じた作戦を立ててゲームができるようにする。
	個人技能	パス、ドリブル、シュート、フットワーク	キック、トラッピング、ドリブル、ヘディング、タックル、シュート、スローイン
	集団技能	速攻、セットオフense、対人防御、地域防御	シュートパスやロングパスを用いた攻撃 スリーバック型、フォアバック型などの防御
	ゲーム	作戦、規則および審判	作戦、規則および審判

ボールでの「速い攻撃のみられるゲーム(小学校5年)」、「攻防の切りかえの早いゲーム」、「速攻(中学・高校の集団的技能の最初に例示)」、サッカーでの「ポジションを守って縦に動き、ボールを相手のゴールに直線的に進めて攻めることができるゲーム(小学校5・6年)」、「キックアンドラッシュ攻撃とその防御(中学校)」といったように、1958年期と同様に縦方向の直線的な攻防が志向されていたことがうかがえる。

ところで、1973年に文部省が編纂した『中学校保健体育指導資料第1集 球技の指導』において、ボールゲームの技能内容の構造が明確に示された。「集団的技能」は味方どうしの組織的なプレーととらえるが、この組織的プレーは「個人的技能」を「集団的技能」に結びつける要素によって成立するものとして、パスアンドランやリターンパスなどの2人以上の「連係動作」と、相手をひとりでかわしたり相手のパスをカットしたりする「対人動作」を位置づけ、「連携動作」は「集団的技能」、「対人動作」は「個人的技能」のそれぞれ分節的な技能としてとらえた(文部省、1973:pp. 12-13)。図1は、「ゴール型」ゲームの「集団的技能」と「個人的技能」の関係性を示したものである。④の「集団的技能」である「組織的プレー」は、③「連係動作」、②「対人動作」、①「ボール操作」の技能を含んだ技能

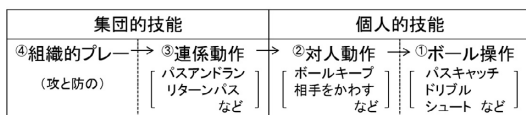


図1 「ゴール型」ゲームの技能構成
(文部省、1973:p. 13を筆者が改変)

であり、またこの④に審判がついて得点を競う場合が「ゲーム」となり(文部省、1973:p. 13)、「ゲーム」が「集団的技能」の学習のねらいとみることが可能であるとした。

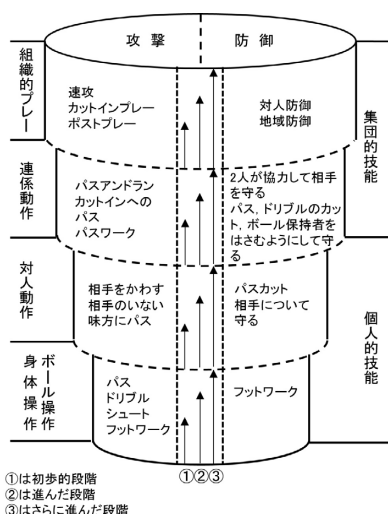


図2 バスケットボールの技能構造
(文部省, 1973:p. 35より引用)

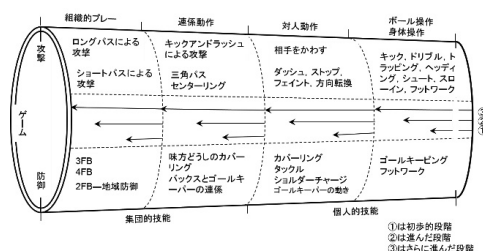


図3 サッカーの技能構造
(文部省, 1973:p. 176より引用)

そして、バスケットボールの技能構造を図2、サッカーの技能構造を図3のように、各種目における具体的な技能構造を示した。このように、「対人動作」は「個人的技能」を「集団的技能」に結びつけていく役割を果たすものであり、「連係動作」は「個人的技能」を「集団的技能」に使い替える技能として位置づけ、技能内容の中核となる「集団的技能」をゲームで使えるようにするための技能の構造化が図られた。このような技能構造にもとづいて、基本的な学習過程については、学習したことがらをゲームで試し、それに必要な「集団的技能」を重点的に学習できるようにし、さらに困難な分節的技能は取り出して練習し、もとの「集団的技能」に戻ってから次の「集団的技能」へと移行できるように配慮することが示された。

また、バスケットボールやサッカーの技能構造をみると、「対人動作」は現在でいうところの「個人戦術」、「連係動作」は「グループ戦術」、「組織的プレー」は「チーム戦術」ととらえることができると考えられ、この時期にボールゲームの技能内容の構造が系統的に体系化され、ボールゲームの技能内容のとらえ方に対する一つの完成形を見出したということができると思われる。

したがって、「集団的技能」というチームやグループの戦術的課題を技能内容の中核として位置づけることで、「対人動作」や「ボール操作」「身体操作」といった「個人的技能」の必要性を描き出し、「ゲーム」の質の向上を企図したことが推察される。

2. 3. 「楽しい体育」期

2. 3. 1. 1977年学習指導要領における「ゴール型」ゲームの技能内容

表4は、1977年期の各学校段階でのバスケットボールとサッカーの技能内容を示している。ここでは、1968年期と同様に、「集団的技能」を技能内容の中核に据えていることから、ゲームの中で「個人的技能」を駆使して攻撃したり防御したりする動きが目指され、ゲームの様相も、バスケットボールでの「速攻(中学・高校の集団的技能の最初に例示)」, サッカーでの「相手ゴールに直線的にボールを進めて攻撃する(小学校5・6年)」, 「キックアンドラッシュ攻撃とその防御(中学校)」といったように、ボールを保持したらなるべく早く相手ゴールの近くにボールを運ぶために、縦方向に直線的な動きをすることがチーム戦術となる「組織的プレー」の最初の段階であると考えられていたと考えられる。

表4 1977年期における「ゴール型」ゲームの技能内容

学年	区分	バスケットボール(小学校はポートボール)	サッカー(小学4年はラインサッカー)
小学校	第4学年	ねらい ポートボールの規則を改良したり,簡単な技能を身につけるとともに,規則を守り,互いに協力して練習やゲームが楽しくできるようにする。	ラインサッカーの規則を工夫してつくり,それを守り,簡単な技能を身につけ,互いに協力してゲームを楽しむことができるようにする。また,勝敗を素直に認めることができるようにする。
	技能	ア チーム全員がよく動き,互いに協力してパスを中心として攻めることができる。 イ 早いパス,パスを受けやすい位置への素早い移動,相手の体に触れないでの守備などの簡単な技能ができる。	ア よく動いて相手のボールを取り,方向をきめてボールをけて攻め合うゲームができる。 イ 互いに離れてボールの来そうな場所に動き,パスされたボールを止め,味方にパスしたり,シュートしたりする。ボールをパスしたら,あいている位置やボールの来そうな位置に素早く移動する。足を使って素早く相手のボールを奪うなどの技能ができる。
	第5・6学年	ねらい チーム内の攻防の役割を分担し,正確なパスを中心として攻撃する技能を養い,それぞれの役割の責任を果たしてゲームができる。	チーム内の攻防の役割を分担し,相手ゴールに直線的にボールを進めて攻撃する技能を養い,それぞれの役割の責任を果たしてゲームができる。
	技能	(ア)味方の位置やその距離に応じた確かなパスができる。また,パスを受けるときはボールに近づいて捕ることができる。 (イ)ピボットなどの技能を習得し,ボールを保持することができる。 (ウ)トラベリング,ダブルドリブル,ファウルについて理解できる	(ア)各ポジションの動きを理解し,縦の動きや縦のパスを使って素早く攻撃できる。 (イ)相手ボールになったら素早くもどって防衛できる。 (ウ)ハンドリング,ブツツキ,危険なプレーについて理解できる。
中学校	ねらい	バスケットボールの技能を習得し,集団的技能を生かした攻防の仕方を考えてゲームができるようにする。	サッカーの技能を習得し,集団的技能を生かした攻防の仕方を考えてゲームができるようにする。
	個人的技能	バスケットボールの最も基本的な個人的技能として,パス,ドリブル,シュートなどが挙げられるが,これらの技能は,集団的技能を組み立てる重要な要素である。 相手と見方とに位置関係を考慮して見方に安全で有効なボールを送るためのパス,ボール保持者が自分でボールを移動させるために必要なドリブル,チームの共通のねらいを達成するためのシュートは集団的技能の基礎になる技能である。	サッカーの最も基本的な個人的技能としては,キック,ドリブル,トラッピング,シュートなどが挙げられ,これらは,ゲームを展開する際の中心になる技能である。キックには,インステップキック,サイドキックなどがあり,ボールをパスしたり,シュートしたりする基礎になる技能であるので,目的に応じて駆使できるようにすることが大切である。トラッピングは,上体や足を使って,ボールをコントロールすることであり,ボールを常に自分の支配下に置いて素早く次のプレーに移れるようにすることが大切である。シュートは,いろいろな方向からパスをもらってボールをけりこむ技能であり,キックによるシュートが主体であるが,攻防の技能が進歩すれば,ヘディングによるシュートやトラッピング,ドリブルなどからのシュートでもできるようにすることが望ましい。
	集団的技能	集団的技能は,味方同士が共通のねらいをもって協力して得点を上げるために行う攻撃の技能と相手の攻撃の動作を妨げるための防衛の技能に分けられる。 ア 攻撃 攻撃するための集団的技能としては,速攻やポストプレーなどが挙げられる。速攻では,相手の防御態勢が整わないうちに素早く攻め込むこと,走っている味方に正確なパスをすることが大切である。また,ポストプレーでは,速いパスワーク,逆をつくパス,ドリブルインあるいはパスアンドランなどで防御陣内を動いて相手の防御の乱れを誘い,素早く攻めることに重点を置くことが必要である。 イ 防衛 防御するための集団的技能としては,対人防御,地域防御などが挙げられる。対人防御では,マークしている相手の動きに注意して抜き去られたり,引き離されたりしないようにすることが大切である。また,攻撃側にシュートされたあとのリバウンドボールを素早くとるため攻撃側をゴール近くに入れないよう工夫が必要である。地域防御では,防御する場所を分担し,5人が協力して動き,相手のシュートを防ぎ,ボールを味方のものにして攻め返すことが大切である。	ア キックアンドラッシュ攻撃とその防御 この技能は,集団的技能の組織だった攻撃方法というよりは,相手の防御の弱いところにボールをけり込み,突進してゴールにシュートする方法で,速攻に用いるのが効果的であるが,どちらかといえば,技能の程度の低い段階で用いる攻撃の方法といえる。この攻撃に対する防御としては,攻撃側に運ばれさせないようにつけるだけ早く帰陣し,互いに自分の役割分担を考えてゴール前を守るということが大切である。 イ ロングパスやシュートパスによる攻撃とその防御 ロングパスによる攻撃は,キックアンドラッシュの攻撃の方法や組織化し,速攻に重点を置いた攻撃の方法である。ここでは,センタリングやロビングなども用いられるので,これらの個人的技能にもある程度習熟することが必要である。シュートパスによる攻撃では,正確なパスを用いて相手の背後へ背後へ短いパスを送り,相手を抜き去って相手ゴールに迫る攻撃の方法である。これらの攻撃に対する防御としては,守る相手をあらかじめ決め,相手側の動きに応じて味方どうしが協力してよい位置を素早く占めて守ることができるようになることが大切である。また,パスやドリブルで抜かれた時は,最も近い味方がカバーし,抜かれたものは素早くバックアップにまわり,防御の体制を整えることが重要である。
	ゲーム	ゲームでは,集団的技能を生かしてゲームができるようにすることが重要である。また,生徒の技能の程度や指導の段階に応じ,チームの人数,ゲームの時間,コート,ゴールの広さ,ルールの程度を工夫し,チームで作戦を立ててプレーするようにすることが大切である。	ゲームでは,相手や味方の位置や動きをよく理解して防御側の弱いところにロングパスやシュートパスを送り,広がりをもった攻撃でシュートすることができるようになることが大切である。また,技能の程度や指導の段階に応じて使用する技能,抜くルール,ゲームの人数,コート,ゴールの広さ,ゲームの時間などを決め,作戦を立ててゲームができるようになることが大切であるとともに,安全の立場から,危険なプレーは行わないようし,タックルについても,ボールに対して行うもので,相手の身体に対して行わないことを徹底して指導することが必要である。
高等学校	ねらい	集団的技能を生かした攻防のしかたを身につけさせ,技能の過程に応じて作戦を立ててゲームができるようにする。	集団的技能を生かした攻防のしかたを身につけさせ,技能の程度に応じて作戦を立ててゲームができるようにする。
	個人的技能	バスケットボールの個人的技能には,パス,ドリブル,シュートなどボールの扱い方が中心となるものと,フットワーク,フェイントなど身体の扱い方が中心となるものがあるが,これらを相手に応じて活用できるようにし,更にゲームでの役割,活用の仕方を理解させて身につけさせるようにする。	サッカーの個人的技能には,キック,トラッピング,ドリブル,ヘディング,タックル,シュート,スローインなどがあるが,これらの技能は,他の種目に比べ集団的技能やゲームにおける重要なものであるので,相手や防御をつけたら,技能を相互に関連づけたり取り扱うようにする。
	集団的技能	集団的技能では,攻撃の技能としての速攻,セットオフフェンス,防御の技能としての対人防御,地域防御などを攻防におけるせり合いを中心に取り扱い,攻撃や防御における味方どうしの協力のしかたを身につけさせるようにする。	集団的技能には,シュートパスやロングパスを用いた攻撃の技能とスローバック型,フォアバック型などの防御の技能が挙げられる。これらの集団的技能は,相手との対応の関係において成り立っている技能であるので,型だけの指導ではなく,攻防のせり合いを中心に,攻撃や防御における味方同士の協力のしかたを身につけさせるようにする。
	ゲーム	ゲームでは,既習の個人的技能や集団的技能を作戦を立てて活用するとともに,規則や審判についても生徒の技能の程度に応じて取り扱うようにする。	ゲームでは,既習の個人的技能や集団的技能を作戦を立てて活用するとともに,規則や審判についても生徒の技能の程度に応じて取り扱うようにする。

1977年期学習指導要領では,体力や技能を重視した「やらされる体育」に対する批判から「楽しい体育」が標榜されたが,ボールゲームの技能内容については従前のものを色濃く踏襲している。これは,1973年に示されたボールゲームの技能構造体系が一定の完成度をもっており,「楽しさ」だけではそれを覆すことは困難であったことが考えられる。さらには,「集団的技能」を中核的な課題にしていることから,「ゲーム」を楽しむためにはチーム戦術にあたる「組織的プレー」の質を向上させることが必要であるとして,「集団的技能」を『媒介項』として重視することが「楽しさ」に直結すると考えられたと推察できる。

2. 3. 2. 1989年期学習指導要領における「ゴール型」ゲームの技能内容

表5は、1989年期の各学校段階でのバスケットボールとサッカーの技能内容を示している。ここで従来までのものと大きく変化している点は、技能内容が「ゲーム」「集団的技能」「個人的技能」の順に示されるようになったことである。そして、作戦を立ててそれにもとづいて勝敗を競うところにボールゲームの「楽しさ」を見出し、その作戦の立案に際しては「集団的技能」を活用することが求められた。このようなことから、「ゲーム」の中で「集団的技能」を発揮し、「集団的技能」を充分に発揮させるために「個人的技能」を習得する必要性を描き出そうとしていと考えられる。

一方で、具体的な技能内容は、「集団的技能」も「個人的技能」も従来までのものと同様のものを示している。小学校中学年で「バスケットボール型」「サッカー型」といったように類型化して技能内容が示されたことから、コートの中を攻守入り交じって得点を競い合う形態のゲームにおける共通した動きに着目した考え方はあったのではないかと推察できるが、実際に技能内容として示されたものは、バスケットボールやサッカーといった種目固有の技能であった。したがって、「ゲーム」そのものを「楽しさ」の根源としながらも、それを実現するため作戦は「集団的技能」での動きにもとづいて立てられるものであるため、「集団的技能」を『媒介項』として重視する立場には変わりないことが考えられる。

表5 1989年期における「ゴール型」ゲームの技能内容

学年	区分	バスケットボール(小学3・4年はポートボール)	サッカー(小学3・4年はラインサッカー)
小学校	第3・4学年	ねらい ポートボールの規則を改良したり、工夫したりして、攻め方、守り方の簡単な技能を身に付け、ゲームが楽しくできるようにする。	ねらい ラインサッカーの規則を改良したり、工夫したりして、攻め方、守り方の簡単な技能を身に付け、ゲームが楽しくできるようにする。
		技能 ア 早くパスをして攻め、早くもどつて守るようなパスを中心とした簡単な連携プレーを使つてのゲームをする。 イ 早いパス、パスを受けやすい位置への素早い移動、パスからのシュート、相手の体に触れないで守るなどの簡単な技能を身に付ける。	技能 ア パスをつないで攻め、パスの方向に素早く動いて守るような簡単な連携プレーを使つてのゲームをする。 イ 方向を決めてパスしたり、空いている位置へ素早く移動してボールをつなぎ、パスやシュートをする。さらにパスの方向に素早く入って、足でボールを奪うなどの簡単な技能を身に付ける。
	第5・6学年	ねらい チーム内の攻防の役割を分担し、パスとシュートを中心として攻撃する技能を身に付け、それぞれの役割の責任を果たしてゲームをする。	ねらい チーム内の攻防の役割を分担し、パスとシュートを中心として攻撃する技能を身に付け、それぞれの役割の責任を果たしてゲームをする。
		技能 (ア) 味方の位置やその距離に応じて的確なパスやドリブルをする。また、ボールを受けやすい位置へ動いてボールを受け、味方にパスしたり、シュートしたりする。 (イ) パス、ドリブル、シュートなどの技能を習得し、ボールを操作する。 (ウ) トラベリング、ダブルドリブル、ファウルについて理解し、よく動いて審判をする。	技能 (ア) 各ポジションの動きを理解し、パスを中心に、状況に応じてドリブルを使つたり、シュートしたりして素早く攻撃する。 (イ) パス、ドリブル、シュート、ボールを足やからだで止めるなどの技能を習得し、ボールを操作する。 (ウ) ハンドリング、プッシングなどのファウルについて理解し、よく動いて審判をする。
中学校	ねらい	球技では、作戦を立てて勝敗を競う課程や結果に楽しさや喜びを味わうことができるようにすることが大切である。	球技では、作戦を立てて勝敗を競う課程や結果に楽しさや喜びを味わうことができるようにすることが大切である。
		ゲーム ゲームでは、技能の習熟の程度などに応じて、チームの人数、ゲームの時間、コートの広さ、ルールの扱い等について工夫し、集団技能を生かし、作戦を立ててゲームができるようにする。したがって、初めの段階では、生徒が身につけている集団的技能や個人的技能を活用してのゲームを中心に扱い、次にこれらの技能の進歩の状況と関連させながら、味方同士が協力し合つて作戦を立てて相手チームに対応したゲームができるようにする。	ゲーム ゲームでは、技能の習熟の程度などに応じて、チームの人数、ゲームの時間、グラウンドの広さ、ルールの扱いなどを決め、集団技能を生かし、作戦を立ててゲームができるようにする。
	集団的技能	集団的技能は、ゲームの状況に応じて、攻防に関連づけながら指導する。 (ア) 攻撃…(例示)速攻、セットオフense(カットインプレー、ポストプレーなど) (イ) 防御…(例示)マンツーマンディフェンス、ゾーンディフェンス	集団的技能は、ゲームの状況に応じて、攻防に関連づけながら指導する。 (ア) キックアンドラッシュ攻撃とその防御 (イ) ロングパスやショートパスによる攻撃とその防御
	個人的技能	個人的技能は、集団的技能を組み立てる重要な要素であるので、できるだけ防御する相手をつけて指導する。 (例示)パス、ドリブル、シュート(セットシュート、ジャンプシュート、ランニングシュート、ドリブルシュート)	個人的技能の指導に当たっては、これらの技能が組織的なプレーにつながるようにすることを配慮して指導する。 (例示)キック、ドリブル、シュート、トラベリング、ヘディング、スローイン
高等学校	ねらい	ゴールへのシュートを競い合うゲームの特性と技能の構造を理解させ、既習の集団的技能や個人的技能をゲームで十分活用できるようにする。	主として足を用いてボールを運び得点を競い合う混戦型のゴールゲームの特性と技能の構造を理解させ、既習の集団的技能や個人的技能をゲームで生かすことができるようにする。
		ゲーム ゲームでは、作戦の立て方、審判法、ゲームの運営の仕方を取り扱う。	ゲームでは、作戦の立て方、審判法、ゲームの運営の仕方を取り扱う。メンバーのポジションや特色を生かした攻防の作戦を工夫して、組織的なゲームができるようにする。
	集団的技能	集団的技能は、速攻、セットオフense、マンツーマンディフェンス、ゾーンディフェンスを取り上げ、ゲームにおける具体的な攻防の場面を想定しながら、お互いに協力して、攻防に有利な動きを身に付けさせるようにする。また、特に、攻防の切り替え場面の展開の仕方を取り扱う。	集団的技能では、シュートやロングパスを用いたオープン攻撃や中央突破の攻撃、スリーバック型やフォアバック型などの防御などの技能の実戦の場面を想定しながら身に付けさせるようにする。なお、特に攻防の切り替え場面での展開の仕方を理解させる。
	個人的技能	(例示なし)	(例示なし)

2. 3. 3. 1998年期学習指導要領における「ゴール型」ゲームの技能内容

表6は、1998年期の各学校段階でのバスケットボールとサッカーの技能内容を示している。ここでは、技能内容の位置づけは基本的に1989年期のものを引き継いで踏襲しているが、具体的な「集団的技能」の内容が変化している。例えば、中学校のバスケットボールでは、従前のものでは高校で示されていた「スクリーンプレー」が例示され、さらには中学校のサッカーでは「組織的プレー」として新たにオフENSEスの「サイドアタック」が「集団的技能」として例示された。これは、競技として行なわれているバスケットボールやサッカーでは、この時期にはかなり高度に戦略や戦術、さらには技術を発達させており、従前の「集団的技能」の内容では現代的なゲームにそぐわない面があったと推察され、時代に即した技能内容を提示するようになったと考えられる。

また、小学校中学年ではボールゲームが「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」と類型化され、それぞれの型の特性に応じた指導がなされることが求められた。しかし、小学校高学

表6 1998年期における「ゴール型」ゲームの技能内容

学年	区分	バスケットボール(小学3・4年はバスケットボール型ゲーム)	サッカー(小学3・4年はサッカー型ゲーム)
小学校	第3・4学年	ねらい コート内で攻守入り混じってボールを手で扱い、簡単な技能を身に付けて、ゲームが楽しくできるようにする。	ねらい コート内で攻守入り混じってボールを主に足で扱い、簡単な技能を身に付けて、ゲームが楽しくできるようにする。
		技能 ア ドリブルやパスをして攻め、早くもどって守るようなゲームをする。 イ 空いているところへドリブルをしたり、方向を決めてパスをしてボールをつないだり、シュートしたりするなどの簡単な技能を身に付ける。	技能 ア ドリブルやパスをつないで攻め、パスの方向に動いてゴールを守るようなゲームをする。 イ 空いているところへドリブルしたり、思いきりシュートしたりするなどの簡単な技能を身に付ける
	第5・6学年	ねらい 攻守が入り交じって行なうゲームの特性に応じて、チーム内の攻防の役割を分担し、パスやドリブルを使ってボールを運びシュートする技能や防御の仕方を身に付けてゲームをする。	ねらい 攻守が入り交じって主に足を使って行なうゲームの特性に応じて、チーム内の攻防の役割を分担し、パスやドリブルなどを使い、相手の守りをかわして攻撃する技能や防御の仕方を身に付けてゲームをする。
		技能 (ア) 味方や相手の位置と距離に応じた的確なパスやドリブルをしたり、受けやすい位置に動いてボールを受け、味方にパスしたり、シュートしたりする。また、相手の攻撃を阻止するためのいろいろな防御の仕方を身に付ける。 (イ) 状況に応じたパスやドリブル、シュートなどの技能を習得し、ボールを操作する。 (ウ) トラベリング、ダブルドリブルなどのいろいろなルールについて理解し、審判をする。	技能 (ア) 攻守のポジションの動きを理解し、状況に応じてパスやドリブルなどを使ってボールを運びシュートする。また、相手の攻撃を阻止するためのいろいろな防御の仕方を身に付ける。 (イ) 状況に応じたパスやドリブル、シュートなどの技能を習得し、ボールを操作する。 (ウ) ハンドリング、プッシングなどのいろいろなルールについて理解し、審判をする。
中学校	ねらい	チームの課題や自己の能力に適した課題をもってバスケットボールを行い、その技能を身に付け、作戦を生かしたゲームができるようにする。	チームの課題や自己の能力に適した課題をもってサッカーを行い、その技能を身に付け、作戦を生かしたゲームができるようにする。
		ゲーム ゲームでは、集団的技能や個人的技能の程度に応じて、チームの人数、ゲームの時間、コートの広さ、ルールの扱い等について工夫し、作戦を立ててゲームができるようにする。 したがって、今もっている技能を活用してゲームを行い、集団的技能や個人的技能の高まりとの関連を図りながら、味方同士が協力し作戦を立てて相手チームに対応したゲームができるようにする。	ゲーム ゲームでは、集団的技能や個人的技能の程度に応じて、チームの人数、ゲームの時間、コートの広さ、ルールの扱い等について工夫し、作戦を立ててゲームができるようにする。 したがって、今もっている技能を活用してゲームを行い、集団的技能や個人的技能の高まりとの関連を図りながら、味方同士が協力し作戦を立てて相手チームに対応したゲームができるようにする。
	集団的技能	集団的技能については、チームの一人一人の能力に応じて攻防の仕方を工夫し、ゲームに生かすことができるようにする。 (例示) (ア) オフENSEス…速攻、セットオフENSEス(カットインプレー、ポストプレー、スクリーンプレーなど) (イ) ディフェンス…マンツーマンディフェンス、ゾーンディフェンス	集団的技能については、チームの一人一人の能力に応じて攻防の仕方を工夫し、ゲームに生かすことができるようにする。 (例示) (ア) 連携プレー a オフENSEス…バスアンドラン(ワンツーパス、壁パスなど) b ディフェンス…カバリング (イ) 組織プレー a オフENSEス…サイドアタック、中央突破攻撃 b ディフェンス…ゾーンディフェンス
		個人的技能 個人的技能については、攻防の仕方との関連を図りながら、ゲーム、集団的技能を組み立てることができるようにする。 (例示) パスとキャッチ、ドリブル、シュート(セットシュート、ジャンプシュート、ランニングシュート、ドリブルシュートなど)	個人的技能 個人的技能については、攻防の仕方との関連を図りながら、ゲーム、集団的技能を組み立てることができるようにする。 (例示) キック、ドリブル、シュート(ドリブルシュート、センタリングからのシュートなど)、ゴールキーピング、(キャッチング、セービング、パンチング、スローイングなど)、トラベリング、ヘディング、スローイング
高等学校	ねらい・ゲーム	バスケットボールでは、相手との攻防の中で、ボールを運び、ゴールにシュートして得点することを競うゴール型のゲームの特性を理解し、既習の集団的技能や個人的技能を活用して、学習段階に応じた作戦を立て、ゲームができるようにする。	サッカーでは、相手との攻防の中で手を用いずにボールを運び、ゴールにシュートして得点することを競うゴール型のゲームの特性を理解し、既習の集団的技能や個人的技能を活用して、学習段階に応じた作戦を立て、ゲームができるようにする。
	集団的技能	集団的技能としては、速攻、セットオフENSEス、マンツーマンディフェンス、ゾーンディフェンス等での自己の役割を理解し、ゲームで生かせるようにする。	集団的技能としては、速攻、速攻、マンツーマンディフェンス、ゾーンディフェンス、チームのシステム、ゴールキーパーとの連携等での自己の役割を理解し、ゲームで生かせるようにする。
	個人的技能	個人的技能としては、パス、キャッチ、ドリブル、シュート、フットワーク、フェイントなどを身に付けるようにする。	個人的技能としては、パス、トラッピング、ドリブル、ヘディング、タックル、シュート、スローイング、フェイント、ゴールキーピングなどを身に付けるようにする。

表7 2008年期におけるゴール型ゲームの技能内容

学年	区分	「ゴール型」の技能内容
小学校	第3・4学年	ねらい ゴール型ゲームでは、基本的なボール操作やボールをもたないときの動きによって、易しいゲームをすること。
		ゲーム (ア)コート内で攻守入り交じって、ボールを手や足で操作したり、空いている場所に素早く動いたりしてゲームをする。 (イ)ゴールにシュートしたり、陣地を取り合って得点ゾーンに走りこんだりするゲームをする。
		ボール操作 〈例示〉・ボールを持ったときにゴールに体を向けること。 ・味方にボールを手渡ししたり、パスを出したりすること。
		ボールをもたない動き 〈例示〉・向かってくるボールの正面に移動すること。 ・ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動すること。
	第5・6学年	ねらい ゴール型では、簡易化されたゲームで、ボール操作やボールを受けるための動きによって、攻防すること。
		ゲーム 攻撃側のプレーヤー数が守備側のプレーヤー数を上回る状態をつくり出したり守備側のプレーを制限したりすることにより、攻撃しやすく、また得点が入りやすくなるような簡易化されたゲームをする。 (ア)投げる、蹴る、止める、運ぶといったボール操作をしたり、ボールを保持する人からボールを受けることのできる場所へ移動したりして、攻守入り交じったゲームができるようにする。 (イ)攻撃側にとって易しい状況の中で、チームの作戦に基づいた位置どりやボール操作によって得点できるようにする。
		ボール操作 〈例示〉・近くにいるフリーの味方にパスを出すこと。 ・相手にとられない位置でドリブルすること。 ・得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートなどをする。
		ボールをもたない動き 〈例示〉・ボールを保持する人と自分の間に守備者を入れないように立つこと。 ・得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートなどをする。 ・ボールを保持する人とゴールの間に体を入れて相手の得点を防ぐこと。
中学校	第1・2学年	ねらい ゴール型では、ボール操作と空間に走りこむなどの動きによってゴール前での攻防を展開すること。
		ゲーム 攻撃を重視し、空間に仲間と連携して走り込み、マークをかわしてゴール前での攻防を展開できるようにする。
		ボール操作 「ボール操作」とは、手や足を使ってボールを操作し、シュートやパスをしたり、ボールをキープすることなどである。シュートは味方から受けたボールを得点をねらって相手ゴールに放つことである。パスは味方にボールをつなぐことである。キープはボールを相手に奪われないように保持することである。 〈例示〉・ゴール方向に守備者がいない位置でシュートすること。 ・マークされていない味方にパスを出すこと。 ・得点しやすい空間にいる味方にパスを出すこと。 ・パスやドリブルなどでボールをキープすること。
		ボールをもたない動き 「空間に走りこむなどの動き」とは、攻撃の際のボールを持たないときに得点をねらってゴール前の空いている場所に走り込む動きや、守備の際に、シュートやパスをされないように、ボールを持っている相手をマークする動きのことである。 〈例示〉・ボールとゴールが同時に見える場所に立つこと。 ・パスを受けるために、ゴール前の空いている場所に動くこと。 ・ボールを持っている相手にマークすること。
	第3学年	ねらい ゴール型では、安定したボール操作と空間を作りだすなどの動きによってゴール前への侵入などから攻防を展開すること。
		ゲーム 仲間と連携してゴール前に空間を使ったり、空間を作りだしたりして攻防を展開できるようにする。 「安定したボール操作」とは、ゴールの枠内に安定したシュートを打ったり、味方が操作しやすいパスを送ったり、相手から奪われず次のプレイがしやすいようにボールをキープしたりすることである。 〈例示〉・守備者が守りにくいタイミングでシュートすること。 ・ゴールの枠内にシュートをコントロールすること。 ・味方が操作しやすいパスを送ること。 ・守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープすること。
	入学年次	ボールをもたない動き 「空間を作りだすなどの動き」とは、攻撃の際は、味方から離れる動きや人のいない場所に移動する動きを示している。また、守備の際は、相手の動きに対して、相手をマークして守る動きと所定の空間をカバーして守る動きのことである。 〈例示〉・ゴール前に広い空間を作りだすために、守備者を引きつけてゴールから離れること。 ・パスを出した後に次のパスを受ける動きをすること。 ・ボール保持者が進行できる空間を作りだすために、進行方向から離れること。 ・ゴールとボール保持者を結んだ直線上で守ること。 ・ゴール前の空いている場所をカバーすること。
		ねらい ゴール型では、状況に応じたボール操作と空間を埋めるなどの連携した動きによって空間への侵入などから攻防を展開すること。
高等学校	その次の年次以降	ゲーム 防御の状況に応じたパスやドリブル、ボールを保持したランニングなどのボール操作と仲間と連携して自陣から相手ゴール前へ侵入するなどの攻撃や、その動きに対して空間を埋めるなどの防御の動きで攻防を展開する。
		ボール操作 状況に応じたボール操作」とは、コート上の空間や味方の動きを見ながら、防御をかわして相手ゴールを攻めたり、味方が次に動く空間を予想してパスを送ったり、味方が相手の動きを見ながらボールをキープしたりすることである。 〈例示〉・守備者のタイミングをはずし、守備者のいないところをねらってシュートを打つこと。 ・守備者の少ないゴールエリアに向かってトライすること。 ・味方が作りだした空間にパスを送ること。 ・ゴールに向かってボールをコントロールして運ぶこと。 ・守備者とボールの間に自分の体を入れて、味方と相手の動きを見ながらボールをキープすること。
	その次の年次以降	ボールをもたない動き 空間を埋めるなどの連携した動き」とは、攻撃の際は、シュートしたりパスをしたりトライしたりするために、相手の守備を見ながら自陣から相手ゴール前の空間にバランスよく侵入する動きのことを示している。また、守備の際は、空間を作りだす攻撃をさせないよう、突破してきた攻撃者をカバーして守ったり、相手が味方の位置を確認して、ポジションを修正して守ったりする動きのことである。 〈例示〉・自陣から相手陣地の侵入しやすい場所に移動すること。 ・シュートやトライをしたり、パスを受けたりするために味方が作りだした空間に移動すること。 ・モールやラックから、味方と連携してボールをつなぐための動きをすること。 ・ボール保持者がプレイしやすい空間を作りだすために、必要な場所に留まったり、移動したりすること。 ・スクリーンプレイやポストプレイなどの味方が侵入する空間を作りだす動きをすること。 ・得点を取るためのフォーメーションやセットプレイなどのチームの役割に応じた動きをすること。 ・チームの作戦に応じた守備位置に移動し、相手のボールを奪うための動きをすること。 ・味方が抜かれた際に、攻撃者を止めるためのカバーの動きをすること。 ・一定のエリアからシュートを打ちにくい空間に相手や相手のボールを追い出す守備の動きをすること。

年以降のバスケットボールやサッカーなどの具体的な種目の中で示されている技能内容は、従前と同様にそれぞれの種目固有の技能が示され、そこから共通する動きを見出すことは難しい。したがって、1989年期のものと同様に、「ゲーム」そのものを「楽しさ」の根源としながらも、作戦の立案と実行を可能とする「集団的技能」の『媒介項』としての重要性は変化していないと思われる。

2. 3. 4. 2008年期学習指導要領におけるゴール型ゲームの技能内容

表7は、2008年期の各学校段階でのゴール型ゲームの技能内容を示している。ここでは、小学校から高校まで一貫して「ゴール型」というカテゴリで技能内容が示され、さらに種目固有の技能ではなくそれぞれのカテゴリに共通すると考えられる「ボール操作」と「ボールを持たないときの動き」が明示された。これにより、ゲームの中でボールを持たないプレイヤーの役割の重要性を理解することが可能になり、戦術的内容が明確に位置づけられるようになった。

しかしながら、発達段階に沿って「ボールを持たないときの動き」をみていくと、「ボールを持たない動き（小学校中学年）」→「ボールを受けるための動き（小学校高学年）」→「空間に走りこむなどの動き（中学校1・2年）」→「空間を作りだすなどの動き（中学校3年・高校入学年次）」→「空間を埋めるなどの連携した動き（高校入学年次の次の年次以降）」といったように、容易で単純な動きから複雑で難解な内容へと線形的に積み上げていくことでボールゲーム複雑な動きを段階的に習得させ、「ゲーム」の質を向上させていこうとする意図がみえてくる。このような流れは、「基礎」を積み上げていってそれらを「応用」し、全体の「ゲーム」へ至るといった従前の学習指導要領の考え方と変化していないととらえることができるように思われる。

3. 「集団的技能」の内容の変遷が示していること

戦後の学習指導要領におけるボールゲームの技能内容の取り扱い方は、系統的な体系が重視されるようになった1958年期以降では共通して「ゲーム」の質の向上が目指されてきた。しかし、ボールゲーム、特にコートの中で攻守が入り交じる「ゴール型」ゲームでは、各プレイヤーの動きが複雑に絡み合っているため、その中の一つの技能の要素を取り出して学習したとしても、「ゲーム」という全体の中ではそれを活用することは困難である。そのため、「ゲーム」とボール操作や身体操作の技能である「個人的技能」を結びつける『媒介項』として、実質的にチーム戦術やグループ戦術の内容である「集団的技能」を位置づけることで「ゲーム」の質を向上させることが可能になると考えられた。そして、1973年の指導資料においてボールゲームの技能構造が明示されたことで、「集団的技能」の『媒介項』として重要な役割を担うことが示された。このことは、「楽しい体育」期になって技能の側面をあまり強調しないようになったときでも、「作戦を工夫する」といった言葉で「集団的技能」の役割の重要性を示してきた。

戦術的課題を学習内容の中核に据えた「戦術学習」が欧米の影響を受けて日本で台頭してくるのは1990年代以降のことである。しかし、戦後の学習指導要領の中では、「戦術」という用語

は使用されていないが、「集団的技能」という実質的に戦術的な内容を取り扱ってきており、この「集団的技能」がゲームパフォーマンスを向上させるために重要な役割を持つことが認識されていたという点で、従前の学習指導要領におけるボールゲームの技能内容を検討することは非常に重要であると考えられる。

一方で、戦術的内容を示している「集団的技能」を「ゲーム」と「個人的技能」をつなぐ『媒介項』として位置づけることによって、現行学習指導要領を含めて一貫して容易で単純なものから複雑で難解なものへと技能の要素を線形的に積み上げていくことで、全体の「ゲーム」を発展させるといったとらえ方がなされてきた。これは、一見誤りであるようにはみえないが、「ゲーム」全体から部分に切り分けた「個人的技能」や「集団的技能」を要素的に積み重ねて全体の「ゲーム」を構築しようとしてもうまくいかないことは、すでに1960年代から指摘されてきており、「ゲーム」全体のとらえ方の指標を打ち出すことが必要であると考えられる。

おわりに

現行学習指導要領におけるボールゲームの技能内容は、「ボール操作」と「ボールを持たないときの動き」で示され、従前のそれぞれの種目特有の技能ではなく、それぞれのカテゴリーに類似していて共通すると考えられる動きの習得が目指されるようになった。このことは、従前の学習指導要領になかった戦術的視点を新たに提供する画期的なものであるということができる。しかし、「ゲーム」の質を向上させるために、「ゲーム」と「個人的技能」である「ボール操作」とを結びつける『媒介項』として、「ボールを持たないときの動き」を位置づけていることには変化がない。このような技能内容のとらえ方の問題点は、ボールゲームの楽しさや面白さは「ゲーム」そのものに内在されていて、得点をめぐる攻防という目的を達成するために戦術や技術が行使されるのであるが、戦術的内容を『媒介項』にすることで手段が目的化されてボールゲームの本質的な楽しさを変容させてしまう恐れがあるところにある。したがって、「ゲーム」の部分的要素を取り出すのではなく、「ゲーム」そのものの変容をとらえる観点を見出す必要があると考えられる。

注

- 1 本稿では、学習指導要領における小学校低・中学年で「ゲーム」、高学年での「ボール運動」ならびに中学校段階以降での「球技」の各領域を総じて、「ボールゲーム」と称する。
- 2 現行学習指導要領では、「ゴール型」ゲームとは「コート内で攻守が入り交じり、手や足などを使って攻防を組み立て、一定時間内に得点を競い合うこと」(文部科学省, 2008b:p. 18)を課題としたゲームとしていて、解説ではバスケットボールとサッカー以外に、小学校ではハンドボール、ラグラグビー、フライングフットボール、中学校ではハンドボール、高校ではハンドボール、ラグビーといった運動種目が例示されている。
- 3 1958年改訂の小学校学習指導要領以降、小学校、中学校、高等学校と接続性を重視するために、文部(科学)省は同時期にそれぞれの学校段階の学習指導要領を改訂し、その直後にそれぞれの学校段階の「指導書」あ

るいは「学習指導要領解説」をいわゆる手引書として提示している。したがって、本稿では、このような各学校段階で同時期に改訂された学習指導要領と指導書あるいは解説を一括りとして年代表記している。例えば、「1958年期学習指導要領」とは、1958年の「小学校学習指導要領」「中学校学習指導要領」、1960年の「小学校体育指導書」「中学校保健体育指導書」「高等学校学習指導要領」、1961年の「高等学校学習指導要領解説」を一括して表現するものとする。

- 4 「B型学習」とは、「体育における分団学習の一つの形態」で、「社会的な協力関係に重点をおく作業分担的な分団学習（異質グループによる）」（竹之下，1955:p. 8）のことで、Bに分類されたものは、「民主的態度の目標（社会的目標）—団体種目—グループ問題解決—行事及び組織的集団活動」といったように関係づけられた（丹下，1955:pp. 14-15）。

文献

橋本正一（1960）「球技の技能内容」と「ゲームの様相」について ―球技指導における根本的課題―，学校体育，13（7）：94-99.

今村嘉雄（1948）学校体育指導要綱解説遊戲篇，日黒書店.

岩田 靖（2004）学習指導要領の変遷，体育科教育，52（2）：160-167.

文部科学省（2008a）小学校学習指導要領，東京書籍.

文部科学省（2008b）小学校学習指導要領解説体育編，東洋館出版社.

文部科学省（2008c）中学校学習指導要領，東京書籍.

文部科学省（2008d）中学校学習指導要領解説保健体育編，東山書房.

文部科学省（2009a）高等学校学習指導要領，東山書房.

文部科学省（2009b）高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編，東山書房.

文部科学省（2010）学校体育実技指導資料第8集 ゲーム及びボール運動，東洋館出版社.

文部科学省初等中等教育局教育課程課（2013）学習指導要領の意義と特色，初等教育資料，900：10-21.

文部省（1947）学校体育指導要綱，東京書籍.

文部省（1949）学習指導要領小学校体育編（試案），大日本図書.

文部省（1951）中学校・高等学校学習指導要領保健体育科体育編（試案），大日本雄弁会講談社.

文部省（1953）小学校学習指導要領体育科編（試案），明治図書.

文部省（1956）高等学校学習指導要領保健体育科編，教育図書.

文部省（1958a）小学校学習指導要領，大蔵省印刷局.

文部省（1958b）中学校学習指導要領，大蔵省印刷局.

文部省（1960a）小学校体育指導書，大日本図書.

文部省（1960b）中学校保健体育指導書，開隆堂出版.

文部省（1960c）高等学校学習指導要領，大蔵省印刷局.

文部省（1961）高等学校学習指導要領解説保健体育編，開隆堂出版.

文部省（1968）小学校学習指導要領，大蔵省印刷局.

文部省（1969a）小学校指導書体育編，東洋館出版社.

文部省（1969b）中学校学習指導要領，大蔵省印刷局.

文部省（1970a）中学校指導書保健体育編，東山書房.

文部省（1970b）高等学校学習指導要領，大蔵省印刷局.

- 文部省 (1972) 高等学校学習指導要領解説保健体育編. 東山書房.
- 文部省 (1973) 中学校保健体育指導資料第1集 球技の指導. 大阪書籍.
- 文部省 (1977a) 小学校学習指導要領. 大蔵省印刷局.
- 文部省 (1977b) 中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局.
- 文部省 (1978a) 小学校指導書体育編. 東山書房.
- 文部省 (1978b) 中学校指導書保健体育編. 東山書房.
- 文部省 (1978c) 高等学校学習指導要領. 大蔵省印刷局.
- 文部省 (1979) 高等学校学習指導要領解説保健体育編体育編. 一橋出版.
- 文部省 (1989a) 小学校学習指導要領. 大蔵省印刷局.
- 文部省 (1989b) 小学校指導書体育編. 東洋館出版社.
- 文部省 (1989c) 中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局.
- 文部省 (1989d) 中学校指導書保健体育編. 大日本図書.
- 文部省 (1989e) 高等学校学習指導要領. 大蔵省印刷局.
- 文部省 (1989f) 高等学校学習指導要領解説保健体育編体育編. 東山書房.
- 文部省 (1998a) 小学校学習指導要領. 大蔵省印刷局.
- 文部省 (1998b) 中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局.
- 文部省 (1999a) 小学校学習指導要領解説体育編. 東山書房.
- 文部省 (1999b) 中学校学習指導要領解説保健体育編. 東山書房.
- 文部省 (1999c) 高等学校学習指導要領. 大蔵省印刷局.
- 文部省 (1999d) 高等学校学習指導要領解説保健体育編体育編. 東山書房.
- 大谷武一 (1947) 学校体育指導要綱解説総説篇. 目黒書店.
- 高橋健夫 (2010) 新しいボールゲームの授業づくり ―学習内容の確かな習得を保証し、もっと楽しいボールゲームの授業を実現するために―. 体育科教育, 58 (3):151-157.
- 竹之下休蔵 (1955) B型学習の狙い. 体育科教育, 3 (11):8-13.
- 丹下保夫 (1955) B型指導をこう考える ―社会性育成の方法論―. 体育科教育, 3 (11):14-19.
- 友添秀則 (2010) 体育の目標と内容. 高橋健夫ほか編著, 新版体育科教育学入門. 大修館書店, pp. 30-38.
- 鶴岡英吉 (1948) 学校体育指導要綱解説球技篇. 目黒書店.

Transition of Skills Contents of the Ball Games in the Curriculum Guidelines :

– Focusing on “Collective Skills” of “Goal-Type” Games –

Fumitoshi SOUNO, Ryohei SATO

Key Words

“goal-type” games, learning of tactics, collective skills, off the ball movement

Abstract

This paper considered changes of handling of the tactical subject paying attention to “the collective skill” of the “goal type” game in the curriculum guidelines after the war. As a result, it became clear that teaching of the ball games in the curriculum guidelines had been aimed to improve the quality of “the games” consistently. In addition, it clarified that “the collective skills” had been positioned as the medium terms to connect “the game” with “the individual skills” as the skills of the operations of the ball and the physical movements. And, it was suggested that the position of “the collective skills” as the medium terms had been taken over as “off the ball movement” in the current curriculum guidelines. Moreover, because of having divided “the collective skills” into tactical elements, it had been intended to develop “the game” as the whole built up linearly from simple and easy to difficult and complex. However, it was difficult to improve the quality of “the game” actually. Therefore, it was suggested that there is the necessity of finding out the viewpoint which catches the change of not only the tactical element of the ball game but also “the game” as the whole.